

## 父子手帳の意義とその分類に関する研究

小崎 恭弘

(神戸常盤短期大学)

はじめに

近年「子育て支援」は単なる子どもとその家族の問題という極小的な捉え方から脱して、社会全体で取り組む社会的な課題へと変化を遂げている。子育て支援が社会的関心事項になりえたのは、大きく二つの文脈が関係している。一つは「少子高齢化」であり、もう一方は近年激増してきている「児童虐待」である。この二つの文脈の中で、子育て支援が語られ大きく注目を浴びている。

そのような背景の中で、従来の子育てではあまり注目を浴びず、役割のない保護者として位置付けられてきた「父親」が、子育て支援が注目される中で新たな役割を持ち、脚光を浴びるようになってきた。厚生労働省の「子育てをしない男性を父親とは呼ばない」などのキャッチコピーを銘打ったポスターなどは記憶に新しい。また少子化対策推進基本方針においても「男性も含めた働き方のあり方」という項目も創設され、ますます男性や父親の育児参加のあり方は注目される。

そのような父親の育児参加を求める機運は高まってはいるものの、実際の育児の場において父親はまだまだ蚊帳の外であり、育児の主体となっているとはいえないのが現状である。さまざまな理由が考えられるが、その一つとして男性・父親の子どもあるいは育児に対する知識・スキルの不足というものがあげられる。女性は母親になるにあたり、妊娠期間を経て出産に向けて体や気持ちが母親へと向き、そのような準備期間がある。病院での母親教室や母体保護の観点からも産前休暇があり、母親への準備期というものが用意されている。そしてその中においてさまざまな知識を得たり、また出産後の産院の中において、沐浴や授乳、おしめの交換や乳児に対するさまざまなかわり方を実践的に学ぶ場が用意されている。またその場の提供と需要は(大変重要なものであるが)その後の育児の大部分と子どもと育児に対する責任までも、母親に一方的に押し付けてしまうものである。

換言すれば、男性は父親になる準備期間や制度がほとんど用意されておらず、また子どもや子育てに対する知識やスキル、あるいは子どもというものの理解がまったくできないままにおいて父親になるのである。そしてその結果育児に対して、無関心無責任になるの

である。そのような父親の育児参加を出生時より積極的に関心をもち、それらについて知識やスキルを得るようにする試みが行われている。それが「父子手帳」である。

## 1. 父子手帳と母子手帳

父子手帳とは現在いくつかの地方公共団体が独自に出版しているものが主体であり、特に法律に基づいているというものではない。それぞれが独自の思いや書式を持ち、また行政の一つのサービスとして配っているものが大半である。

「父子手帳」を定義すれば「父子手帳とは、広義としては妊娠、出産、育児に対する父親の理解を高めるための啓蒙書を含めた書物の総称である。狭義では、父親が妊娠、出産、育児に主体的に取り組み、また実際に何かしらの記録や書き込みを行い、それらを通じてより高い意識で子育てに取り組みができるように父親を支える書物の総称である。」とする。

父子手帳が父親を対称にしているのに対して、わが国には母親を対象として「母子健康手帳」がある。母子健康手帳とは『母子保健法』に基づき、都道府県知事が妊娠の届け出をしたものに交付する手帳。妊産婦や乳幼児が医師・歯科医師・助産婦・保健婦の健康診査や保健指導を受けた時、指導上必要な事項が記入される。母子手帳<sup>①</sup>とされている。母子手帳が母子保健法という法的根拠をもって妊婦全てに配られるのに対して、父子手帳は行政のあくまで任意であり、また対象にもばらつきがある。これら両者の違いは、もちろん母性保護と胎児の健康的発達という大きな違いはあるが、その後の子育てに対する意識にも違いがあらわれると考えられる。

## 2. 父子手帳の歴史と分類

本邦で父子手帳としてはじめてかかれたものは「父子手帖」<sup>②</sup>として汐見らが1994年に発刊したものである。行政が父親の育児・子育てを主眼にして発行したのは、1995年「父親ハンドブック」<sup>③</sup>の東京都がはじめてであろう。その後出版社や各地方公共団体などが発刊し、現在筆者が確認したものでは約20種類ほど見る事ができる。出版社が全国の自治体向けに発刊している

ものが1冊、個人で発行しているものが1冊、先にあげた汐見らの書籍が1冊である。そして後の残りは、基本的には各地方自治体やあるいは、それに準ずる形で(医師会・財団法人等)が発行しているものである。それらについて、検討し比較分類を行った。

(詳しい内容に関しては当日資料配布)

また近年注目されたのは、フランス政府が世界ではじめて国家として「父子手帳」を発行したことである。これはフランス家族省の外郭団体である家族手当公庫が申請した人に手帳を発行するというものである。<sup>6)</sup>

### 3. 父子手帳の特徴とその背景

#### ・父子手帳の特徴

父子手帳の特徴の一つとして「多様性」をあげる事ができる。様々な、基本的には自治体が、各地域性や自治体の動向などを踏まえた上で書かれている。従って内容やボリュームなども千差万別である。また担当している部署や課なども様々である。保健衛生分野の担当であったり、児童課や福祉課などであったり、また男女共同参画課担当と多種多様である。それだけ子育てや父親参加が、社会の様々な分野で要請を受け、必要とされているといえる。

またこれらの製作段階で、医師や保健婦、そして保育士など子どもを取り巻く専門職が協力して作り上げている事も特徴としてあげられる。

そのような多様な内容の父子手帳ではあるが、それぞれ独自の作りになっている中で、いくつかの共通点を見出す事ができる。それらは以下の3点に集約できる。

#### ①父親の育児参加の啓発と実践の関わり

父親を対象にしているのが当然ではあるが、子どもや子育てに対して、全くかかわりがないという前提で書かれているものが多くある。したがって多くのものがたいへん親しみやすくわかり易く書かれている。イラストや図表の活用も多くされている。また記述法も語りかけるようなものや、クイズや漫画、インタビューやアンケート内容などもあり、盛りだくさんの感じを受ける。子育てを何かしら難しいものや自分たちにかかわりのないものとしていた、男性や父親たちの興味関心を得るための、様々な工夫が行われているといえる。

#### ②育児における人間的成長の強調

育児をする事の意義や、子育てから得られる事や様々な体験などが多く書かれている。その中において育児が父親として、そして人間としての成長に大きく

関与するというスタンスが取られているものが多い。また家族を持つことへの責任や幸せについての記述も多くあり、子育ての意義やそれによって得られる家族の絆や、父親・母親としての人間的な成長を全面的に押し出している。

#### ③夫婦間のパートナーシップの確立

母子手帳がほとんど父親について述べられていないのに対して、妊娠をふまえて書かれている父子手帳は子育てを母親だけのものとするような記述はない。子育てについても妊娠時のパートナーの変化や配慮点などをはじめに持っているものもあり、子育てを夫婦間での共同作業として位置付けている。そこにおいては男女共同参画的な背景が伺う事ができる。

#### ・父子手帳が求められる背景

簡潔に結論を述べてしまえば、時代の要請といえる。いわゆる「育児＝母親」の公式が通用しなくなった。あるいはその公式自体が時代にそぐわなくなったといえる。それにいたる過程に置いてはいくつかの流れがあると考えられる。

#### ①少子化が社会問題として捉えられている

少子高齢化が社会全体の課題として取り上げられ、その原因や対策などとして、男性や父親に対して社会的な関心が高まっている。

#### ②男女共同参画社会の萌芽期が訪れている

子育てや出産など、従来は「女性」が行うものや女性の分野とされていたものが、社会構造や価値観、ライフスタイルの変化により、男性とのかかわりや夫婦・パートナーとの関係性の中で語られ、関心が払われるようになってきている。

#### ③子育てに対する不安の増大

虐待や子どもを取り巻く様々な事件や事故等、子育て環境や社会状況が、たいへん悪化している。そのような中で子育てについて、今まで以上に注意や関心が払われるようになってきた。

#### ④男性の意識の変化

社会状況の多様化や経済状況の変動など、個人のライフスタイルや価値観が社会全体で拡散した。その中で男性の生き方や考え方に、家族とのかかわりや子育てを重視する傾向が現れてきた。

#### 【参考・引用文献】

- (1)新村出編 「広辞苑第五版」1999 岩波書店
- (2)汐見稔・長坂典子・山崎喜比古「父子手帖」1994 大月書店
- (3)父親ハンドブック編集委員会(東京都福祉局子ども家庭部計画課)「父親ハンドブック」1995
- (4)日本経済新聞 2002年4月14日